

(3) ②様式第3号-2 (報告書)

※文字のフォント、大きさは Meiryo UI / 12ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。

※写真は、進行プログラムに沿って適宜、右ページに簡単な説明文を添えて貼り付けてください。

※必ず A3 片面 1 枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは 5 MB 以下としてください。

NITS・教職大学院・教 育委員会等	実施機関名・連携機関名 千葉大学大学院教育学研究科高度教職実践専攻
コラボ研修プログラム	事業名： 千葉大学教職大学院シンポジウム
支援事業報告書	研修等名：【NITS・千葉大学教職大学院コラボ研修】 千葉大学教職大学院シンポジウム 「教育現場の今、そしてこれから」 ～学習指導要領の改訂を見据えた人材育成の在り方～
	開催日時：令和8年2月7日 13時00分～16時30分 開催場所：千葉大学けやき会館（千葉県千葉市稲毛区弥生町1-33） 参加人数（総数）と参加者の属性：参加人数184人 （現職教諭62人、管理職63人、大学・学生行政他59人）

目的：

令和の日本型学校教育の理念のもと、次期学習指導要領改訂を見据えた人材育成の在り方をテーマに開催する。「カリキュラム・マネジメントの実質化」や「個別最適な学びと協働的な学び」を担うリーダー育成の方向性を、多様な視点から探り、これからの学校教育の姿をともに考える。

内容：

基調講演 「一人一人の個性と可能性を伸ばす千葉県教育の実現に向けて」

～子どもたちと先生の笑顔のために～ 千葉県教育委員会 教育長 杉野 可愛 氏

(概要) 千葉県の児童生徒の学力・体力や生徒指導上の状況などのデータを基に、教育の現状と課題が整理された。学力は概ね全国水準にあるものの、主体的な学びの深化や記述式対応が課題として示され、体力低下やメディア接触時間の増加、不登校等の課題の複雑化にも言及された。また、児童生徒数減少など教育環境の変化が示され、学力向上施策や ICT 活用、不登校支援等の県の取組が紹介された。今後は魅力ある学校づくりと教員確保・働き方改革を通じた教育の質向上を図る方向性が示された。

シンポジウム

【シンポジスト】

国立教育政策研究所初等中等教育研究部長 白水 始 氏

千葉市教育委員会 学校教育部長 川名 正雄 氏

館山市立北条小学校校長 石川 康浩 氏

【コーディネーター】

千葉大学教育学部 教授 貞廣 齋子

(概要) 教育行政、学校現場、学識経験の各立場から人材育成に関する提言が示された。学校における実践としては、カリキュラム・マネジメントの PDCA を基盤とした組織的授業改善や OJT の積み重ねが教員の力量形成につながる事が示された。行政の視点からは、個別最適化や参加参画型研修への転換を通じて主体的な学びを促す研修体系の必要性が指摘された。さらに学識的視点からは、子どもの学びを中心に据えた学習環境の再構築や授業研究コミュニティの形成、データ共有や ICT 活用を通じた教員の学び合いの重要性が論じられ、専門職としての協働的成長を支える基盤づくりの方向性が示された。

成果：終了後のアンケートから（回答数 76 人）

内容に満足できたか…とても満足 45 人 やや満足 23 人 どちらとも言えない 8 人

<自由記述>

- ・国、行政、学校の代表とされる方々からの最先端のお話が非常に勉強になりました。これからの教育現場で何をしていくべきか、それに伴う困難や問題点も考える事ができました。
- ・様々な視点から、あらためて「人材育成」について見つめ直すよい機会となりました。今後の学校経営を考え、来年度の学校経営方針について多くのヒントをいただきました。
- ・教育長の講演はいつも心に潤いをもたらせてくださいます。学校は今、負の話が多いですが、教育長のお話を伺うと教員を目指していた頃の気持ちを思い出し、教員としての原点に立ち返ることができます。

「NITS からの提案（第一次）」との関連における研修担当者としての気付き

本シンポジウムを通じて、研修担当者として、教職員研修を「講師が何を伝えるか」ではなく「参加者にどのような気付きや変化が生じるか」を基点に構想する必要性を改めて認識した。NITS からの提言（第一次）が示すように、研修を通して形成される〈共通言語〉は教育実践を共有する基盤として重要であり、知識の伝達にとどまらず参加者同士の対話を通じた意味形成が求められる。本シンポジウムでは、多様な立場からの提案を契機に討議が展開され、参加者が自らの実践と照らし合わせて考える契機が提供された点において、共通言語形成の場として機能した側面があったと考えられる。

また提言で示される「知識・技能」「経験」「省察」の相互作用により気付きを醸成する三角形モデルの視点から見ると、討議や振り返りを通じて自己の実践を再解釈する過程が生まれており、気付きの深化を促す研修的要素を備えていたと捉えられる。多様な立場の知見が交差する構成は新たな視点をもたらし、経験の再意味付けを促進する契機となったと感じられた。

今後の研修設計においては、三角形モデルの循環をより意図的に組み込み、参加者の状況を踏まえた目標設定や振り返り機会の充実を図ることで、共通言語の形成と気付きの深化を支える研修デザインへと発展させていく必要があると認識した。

アイデアや工夫したこと：

○学識経験、教育行政、学校現場の各立場の知見が相互に補完し合うよう、基調講演及びシンポジストの構成を設計

○テーマにかかる基調講演、シンポジストによる提言から始める



○質問や自らの意見を Google フォームにて回収・集約したものを参考に、コーディネータが討議の柱を整理しディスカッションに役立てる

ご質問・討議してほしいこと

B I U ☺ ✕

フォームの説明

お名前をご記入ください。*

短文回答

3名のシンポジストの提言で質問したいことや、このあとに討議してほしいことをお聞かせください。*

短文回答

